であった．子宮筋腫を病理学的に分類しスキャン像を検討すると腺筋腫例では病巣部に一致した比較的淡い集積，ライオミオーム例では前者よりも強い充実性の集積を認め，混合例では両者の特徴を合併している像を得た．ラジオオートグラムでは，腺筋腫例では均等の分布を得た．さらにライオミオーム例で正常子宮筋に比してほぼ1.5倍の筋腫核に放射能を認めた．一方腺筋腫例では，ほとんどその差は認められなかった．

35. ^{201}Tl-chloride による腫瘍シンチグラムの検討

中島　哲夫　　角　　文明
砂倉　瑞良
（埼玉県立がんセンター・放）
田部井敏夫
（同・内）
佐々木康人
（聖マリアンナ医大・3内）
永井　輝夫
（群馬大・放）

^{201}Tl-chloride による腫瘍シンチグラフィーの臨床的意義を，特に肝癌，甲状腺癌，肺癌について検討した．

方法と対象：日本メジフィジックス社製の^{201}Tl-chloride 2 mCi を静注し，10分後より病変部のシンチグラムをガンマカメラを用いて撮像した．対象は，原発性肝癌3例，転移性肝癌6例，甲状腺癌7例，肺癌4例，腎癌2例，良性疾患6例の計28例である．

結果：肝癌については，肝スキャンと対比し，S.O.L. への ^{201}Tl の集積を正常部と比較すると，原発性肝癌では全例に正常部より強い集積が見られ，転移性肝癌ではいずれも正常部より少ない集積を示した．両者の鑑別診断の可能性が示唆された．

甲状腺癌では全例に陽性描画が得られたが正常部より強い集積を示したものは無かった．肺，骨，脳などへの遠隔転移も良く描出された．甲状腺腺腫，慢性甲状腺炎各1例では強い積集が見られた．

原発性肺癌4例でも陽性率は100％であったが，^{67}Ga による腫瘍スキャンと比較すると，腫瘍/B.G. 比が低いこと，縦隔病変において胸骨による放射能吸収によると思われる False negative があること，心影と重なる病変は描出困難であることなどの点でガリウムよりも劣ると思われた．しかし，検査が短時間で終了し，^{99m}Tc 製剤によるイメージングを引き続き行なえることは臨床的に有利であった．

36. 大腿四頭筋拘縮症症例の ^{201}Tl・筋スキャン

鈴木　良彦　　宮石　和夫
細野　紀一　　前原　康延
井上登美夫　　永井　輝夫
（群馬大・放）
小泉　慶一
（同・整）

下肢の筋を直接描記し，病巣の広がりを観察する目的で，大腿四頭筋拘縮症5例，および対照として下腿正常者3例，両下肢に強度の浮腫を伴った1例の計9例に ^{201}Tl による下肢筋スキャンを施行した．拘縮症症例は，病巣が両側性のもの3例，右側のみのもの2例であった．スキャンに際し，下肢への集積を良くするため，あらかじめ約15分間の階段昇降運動を行なった後，^{201}TlCl 2 mCi を静注，投与後5分より撮像した．

両下肢浮腫を伴った症例を含めた対照群では，両側下肢に均等で，かつ十分な集積が認められた．一方，病巣が片側性の拘縮症症例では，患側において，病巣の広がりに一致しての明らかな取り込みの減少が認められた．また，両側性拘縮症症例では，両側下肢全体に集積低下がみられ，左右を比較してみると障害の程度がより強い側に，より強度な取り込みの減少が認められた．このような左右集積差を比較するため，大腿部に関心領域を設定し，左右大腿部総カウント比をみてみると，

Presented by Medical*Online

対照群はすべて93%以上であったのに対し，障害の程度に左右差のある拘縮症症例では，85%以下であった．

今後，症例を重ね，さらに検討を加えれば，^{201}Tl による下肢筋スキャンは拘縮症症例における病巣の広がり決定に，また筋ジストロフィーなどの神経性筋肉疾患の評価にも役立つ検査法となりうる可能性が高いと考えられる．

37. 糖尿病患者の唾液腺シンチグラフィー

勝山　直文　　黒田　敏道
阿武　　泉　　原田　潤太
川上　憲司　　多田　信平
望月　幸夫
（慈恵医大・放）
横山　淳一　　阿部　正和
（同・3内）

唾液腺シンチグラフィーは，従来より唾液腺腫瘍，炎症，シェーグレン症候群などに用いられ，その有用性については多数の報告を見る．今回，われわれは糖尿病患者に耳下腺腫大が多いことに注目し，種々の糖尿病患者に唾液腺シンチグラフィーを施行して，興味ある結果を得たので報告する．

対象：正常14例と糖尿病患者42名（成人型糖尿病で耳下腺腫大のないもの17名，著しい耳下腺腫大のあるもの12名，若年型7名，血管合併症の進展著しいもの6例）である．

方法：検査前にクエン酸10 mgを経口投与し唾液を排出させた後，^{99m}Tc-pertechnetate 10 mCi 静注し，その直後よりシンチパック200にデータを入力させた．静注15分後に再び，クエン酸刺激を行ない，唾液の排泄を見た．

結果：耳下腺腫大例はシンチフォトにて全例，他の群に比し，耳下腺腫大を認めたが，顎下腺の大きさには正常群，他群と優位の差はなかった．耳下腺と顎下腺の単位容積当りの放射能を比較すると，正常群は耳下腺が強く，全糖尿病群では顎下腺が強い傾向にあった．クエン酸刺激による，単位時間当りの唾液の排出を見ると，合併症の進んだ例ではその程度の強いものほど，また罹病期間の長いものほど低い傾向にあったが，耳下腺腫大例や若年型では優位に低い傾向は見られなかった．

以上より，糖尿病と唾液腺機能の関係は密接で，特に合併症群では唾液腺機能の低下が強いことがわかった．

Presented by Medical*Online